

下馬兵舎時代の 思い出の絵地図

昭和20~30年代

団地ができる前の下馬は、旧陸軍の兵舎が立ち並ぶまち。
地図を囲んで話をしたり、まちの移り変わりや
身近な人の人生に思いをはせてみませんか？

※地図は昭和23年の航空写真（国土地理院提供）
をベースに作成していますが、思い出話
は多くの兵舎があった昭和20~30年
代にわたっています。

兵舎の中のお店いろいろ

■ 組合事務所の前
山田精米店や大塚の布団屋。
昔はお茶屋や焼き芋屋も。

■ 松寮の裏
平屋のお店がいろいろ。
小野寺さんの炭屋、松岡さんの魚屋、
伊藤さんのせんべい屋、
長谷川さんの床屋、パーマ屋など。

■ 南部協同組合
背中合わせでお店が3軒ずつ。
乾物、八百屋、床屋が2軒など。

ほかにもお店はあちこちに。
紙芝居やアイスクャンディ、出張くず屋などの
移動販売も。

■ 組合事務所
1階には魚屋や肉屋、八百屋、医者など。
2階は「大興社」という学生服をつくる会社があり、
ミシンがたくさん置かれていた。



組合事務所（昭和25年/世田谷デジタルミュージアムより）



都営住宅の前で（昭和29年頃/篠原勇さん提供）

昭和30年に開校
池尻小学校
池尻中学校

肥溜め多数
開拓農団の養豚場

「かまぼこ幼稚園」
って呼んだよね。
昭和28年頃に移転
農園
陸稲、麦、とうもろこし、
キャベツ、スイカなど
戦前は駒沢練兵場
今は世田谷公園

松寮の2階からは隅田川
の花火大会が見えた！
昭和28年頃に移転

1mくらいの土手
メンコやペーゴマを売り買い。
貸し自転車で練習も。
各寮にもあり

火事のあとに避難生活。
普段は入らないよ。
この頃からあった！



寮のお祭り（昭和26年頃/篠原勇さん提供）

昭和三十年十一月、大火事
保安隊の引率で学校から帰宅。
麻雀工場からながめたなあ。

元々は馬小屋。馬を留める柱や飼馬桶
があり、水道も馬の水飲み用のかたち。
昭和30年11月、大火事

違反をした兵隊が
入れられたらしい。

中里小・駒繫小とも、子どもが多くて
午前午後に分けられた年がある。

間違えて午後に行くと
給食だけ食べて帰された。

下馬地区アートプロジェクトで出会った
みなさんから折に触れてお聞きした「兵舎の時代」
の話。「兵舎がばーっと並んで」「廊下で煮炊き」
「手作りの神輿」「よく火事があった」・・・
一体どんな時代の、どんな暮らしだったんだろう？
そんな疑問から、兵舎の暮らしを少年時代に経験し
今も下馬在住の3名の方にお集まりいただき、
地図を囲みながら当時の思い出をインタビュー。
うかがったたくさんのお話をもとに地図とイラストをつくり、
この「思い出の絵地図」にまとめました。



詳しいお話とイラストは裏面に→

思い出の絵地図

暮らしのエピソード

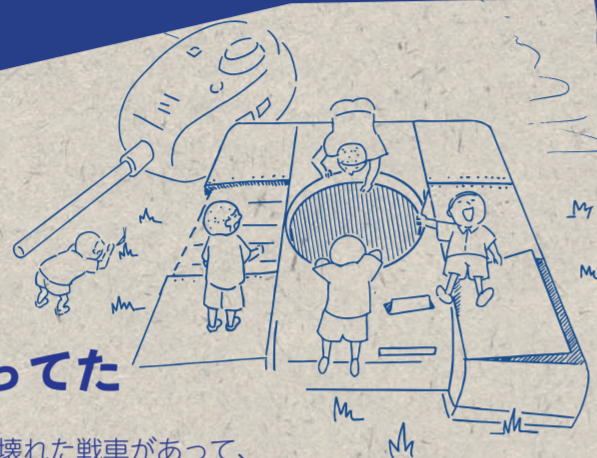
インタビュー中に印象的だったお話をイラストと一緒にご紹介。

進行・編集・文 阿部健一
地図デザイン 齋藤優衣
イラスト 譚林宣（武蔵野美術大学大学院造形研究科 博士後期課程）
発行 特定非営利活動法人演劇百貨店、世田谷パブリックシアター
発行日 2021年9月4日

砲身なんか取れちゃった

昭和24年頃、菊寮の南の草むらには壊れた戦車があつて、こどもの遊び場になっていました。先に年上が遊ぶので、小さいこどもが遊べたのは夕方頃。遊ぶといっても、中は狭くて入れず、戦車もボロボロ。この頃はあちこちにくず屋があり鉄くずを買って売ったので、多分取れる部品は誰かが取って売ってしまったのでしよう。

戦車と同じく昭和24、25年頃のある日、菊寮1階の畳工場の奥からゾロゾロと何台も戦車が出てきました。砲身は切られていたものの、まだ動く戦車。大人は「終戦処理班」と呼んでいましたが、軍の兵器の処分の一環だったようです。束の間、こちらもこどもの遊び場に。その後、この場はグラウンドとしてしばらく町会の運動会や野球に使われました。



ごはんもおかずも煮炊きは廊下

兵舎はあくまで兵隊の集団生活のための宿舎。室内は料理をするようにできておらず、廊下に七輪を出し、ごはんからお吸い物まで煮炊きをしました。文字通りお隣の晩飯がわかる暮らしです。目を離した隙にごはんがなくなった、なんてことも。よく食べたのは麦飯やさつまいも。こどもも手伝いましたが、うっかり麦を流そうものなら鉄拳制裁。当時、食べ物はずっと貴重でした。ちなみに水道と便所は共同で寮の外にありました。2階に住んでいると水汲みに一苦労だったようです。



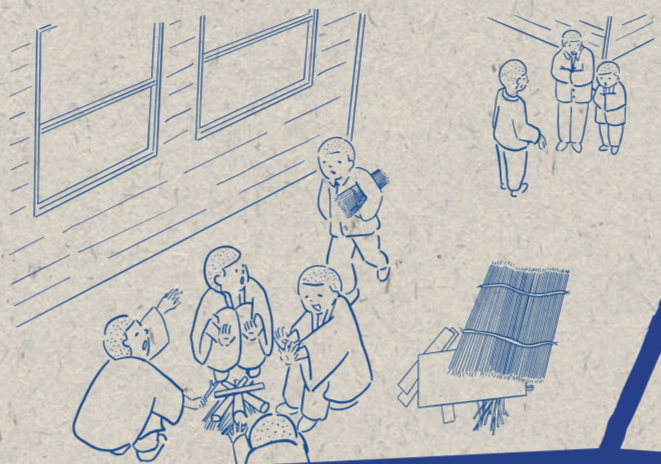
部屋のなか

入ってすぐに上がりかまちで、広さは六畳ほど。窓があり、真ん中に裸電球。そこに家族みんなで住みました。兵舎は「抜けた下の歯を屋根の上に投げても届かない」くらい高さがあったので、家族が多い家は中二階を自作することも。終戦から時間が経っても入居者が増え続けたため、広いといえない部屋をベニヤ板で半分に仕切り、2家族が住むこともあったそうです。部屋によってはラジオがついていて、組合事務所の機械を経由しNHKを受信していました。

燃料を持ってこないと当たれない

冬の兵舎は冷えました。暖房器具もないので、朝6時ごろに起きるとこどもたちは学校にいく前に外でたき火をしました。高学年中心に10人くらいでしょうか。この頃、こどもたちは基本的に同じ寮のこどもと群れていました。行動範囲は限られており、松の子が竹に行ったり梅の子が桜に遊びにいったりということはありません。そんな寮のこどもグループは、大人顔負けの厳しい縦社会だったといえます。

たき火を仕切るのは寮で力のあるこども。寒くても、燃料を持ってこないやつは火に当たらせてもらえません。米俵や棒切れなどどうにか燃やせるものを探しました。ちなみに大人は大人でたき火をしており、兵舎の壁をはがして燃やしてしまう人もいたそうです。



「世田谷郷」って？ ～文献より～

もともと原野や農地が広がっていた下馬の一带は、明治の中頃に駒沢練兵場や近衛野砲兵連隊などさまざまな部隊の兵舎が設けられ、終戦まで「軍隊のまち」でした。終戦直後、焼け出されたり外地から引き揚げて住む場所に困る人が大勢いる状態をみて、「聖旨奉戴平和日本建設教団」というキリスト教団体の玉置さんという人物が中心になって国や都に働きかけ、兵舎を住宅として利用できることに。10月には戦災復興町会が発足し、組合の結成や練兵場の農園化、武器修理工場の転用、授産所の開設など、生活再建のためさまざまな取り組みがなされたようです。そんな戦災者・引揚者住宅は「世田谷郷」と呼ばれるようになりました。しかし明治の木造建築は火に弱く、たびたび大きな火災に見舞われました。そうした中で鉄筋アパートへという機運が高まり、昭和33年より徐々に団地への建て替えが実現。兵舎時代の風景は姿を消していきました。

<年表>

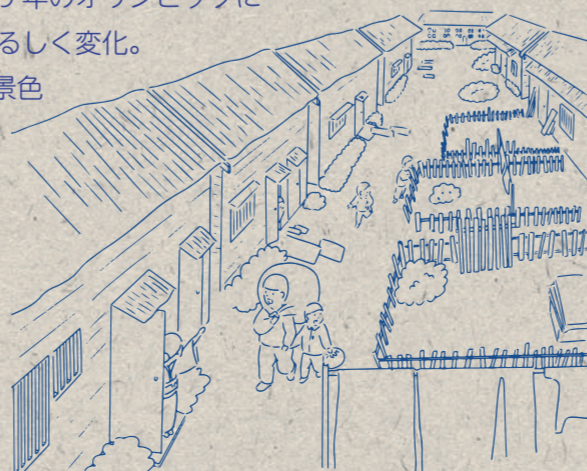
明治24年	池尻に騎兵第一大隊営が移転、徐々に「軍隊のまち」に
昭和20年8月	太平洋戦争、終戦
昭和20年10月	戦災者の入居がはじまり、「戦災復興町会」が発足
昭和21年2～3月	昭和天皇による東京巡行、世田谷郷を訪問
昭和30年3月	昭和女子大の大火、この時点で戦後都内最大の火災
昭和33年	鉄筋コンクリートの「下馬アパート」、建設開始
昭和39年	東京オリンピック開催

<主な参考資料>

アサヒグラフ（昭和20年12月5日）、「世田谷近・現代史」東京都世田谷区（昭和51年）
「ふるさと世田谷を語る 上馬・下馬・野沢・三軒茶屋・駒沢1～2」世田谷区生活文化部文化・交流課（平成6年）
「1945-54 写真で見える戦後復興期の世田谷」世田谷区立郷土資料館（平成19年）
読売新聞 昭和30年3月1日、昭和35年6月13日夕刊
朝日新聞 昭和28年2月17日、昭和30年11月14日、昭和33年8月8日

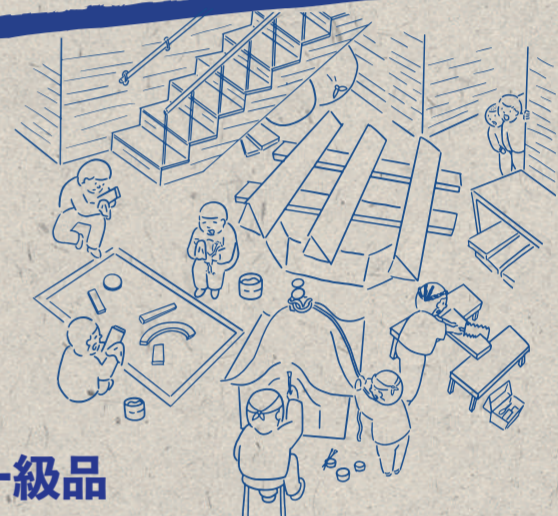
すごい勢いで建ったり壊されたり

昭和20年代、続々と帰国する引揚者にとにかく「住まいを提供する」必要がありました。都は兵舎のすきまに2世帯用の板張りの住宅（ニコイチと呼ぶ人も）やプレハブを次々建設。菊寮の北側のグラウンドも、藤寮や椿寮のあたりも、火災の跡地もそうした住宅に置き換えられていきます。建てたり壊したりする中で、兵舎内での引っ越しも度々ありました。昭和30年代に入ると三宿通りもつくられ始め、昭和39年のオリンピックに向けてまちも人もめまぐるしく変化。どんどん変わってしまう景色こそが、この時代の風景だったともいえるかもしれません。



「連隊のこどもと遊ぶな」

こどもの上下関係は、いつでもどこでも絶対でした。当然あそびも寮のグループ。先輩命令のひとつが「肥溜めを走って渡れ」。駒沢練兵場の跡地に作られた農園にはあちこちにフタのない肥溜めが。表面が少し硬くなっていたので、その上を走って渡る。運動神経のない子はひどい目にあいました。他にも「弾丸倉庫の上から飛び降り」「シマヘビを捕まえる」など。その中でやっていくには腕節も重要。へなちょこじゃやっていけず、人によっては「悪いことも相当やった」そうです。そんなこどもたちを近隣の大人は「連隊のこども」と呼びました。親から「連隊のこどもと遊ぶな」といわれる子も少なくなく、近隣の人々からするとかなりヤンチャなこどもたちに見えたようです。



松寮の神輿は一級品

世田谷郷に住んだ人はあちこちから来た「寄せ集め」。その中には、絵描きや宮大工といった修行を積んだ職人も少なくなく、彼らの技を活かして寮ごとに御神輿がつくられました。特に松寮のものは一級品で、絵描きの描いた浮き彫りの龍はすばらしかった、とのこと。神輿はバラして兵舎の中にしまっており、9月の祭りが近づくに階段横の広間にゴザを広げて協力して組み立てます。真鍮の飾りをピカールで磨いてサビを落としたり、紅白のロープをより合わせるのを手伝ったり、こどもの仕事もありました。組合事務所の前はちょっとした広場になっていたため、お祭りのときはそこが神酒所になったそうです。

兵舎時代を振り返ってひとこと



この頃はある意味閉鎖的。よその寮には入らなかったし、正直なところ、限られた範囲しかわからないんだよね。別の寮に住んでた人や、もっと先輩の話も聞けるといいんだけど。でもそうやって集団の中で生きてきた経験は仕事を始めてからも活かされたよ。
（早川さん・昭和18年生／松寮出身）

母が池尻を通ったとき、兵舎の住宅化を都にかけあった玉置さんの弟子が「家のない子はちょっとおいで」と歌っていたのが入居のきっかけだったと聞きました。下馬は勤めに行くにも便利な場所で、出ていく気は全然なかったね。
（長澤さん・昭和18年生／萩寮出身、大火後は蘭寮）



昭和20年10月にこのまちに引っ越してきて、兵舎に住んでいたのは10歳頃まで。祖母や叔父叔母、いとこがいたものですから、楽しい少年時代だったと思います。でも同じ経験をした人がひとりひとりなくなっていくのは寂しいですね。
（篠原さん・昭和19年生／菊寮出身、梅寮を経て松寮裏の都営住宅へ）

うかがったお話は、あくまで一人一人の思い出の風景。あなたの思い出の風景はどんなものですか？